

氏 名	ふか い とも あき 深 井 智 朗
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	論 文 博 第 493 号
学位授与の日付	平 成 17 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	超越と認識 20世紀神学史における神認識の問題

論文調査委員	(主 査) 教 授 片 柳 榮 一	助教授 芦 名 定 道	教 授 藤 田 正 勝
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

1 本論文の目的

本論文は、20世紀におけるドイツ語圏神学界の動向を、神認識の問題に焦点をあてて解明しようとするものである。その焦点は、「世俗化し、日常世界から超越的なものが既に退場を命じられたかに思われている世界において、いかにしてなお神について語り得るか」という点にある。同様の問題設定は19世紀にも見られたが、20世紀の神学者たちは、19世紀の神学者たちが、超越について語り得る根拠を人間がアプリアリに持つ宗教性に求めたことは、フォイエルバッハの宗教批判（すなわち神学の秘密は人間学であるという命題）の前には無力だと考えた。それ故に20世紀の神学者たちは、近代以前の神学者たちが自然神学という前提の上に神認識の問題を扱ったのとは反対に、無神論という前提の上で神認識の問題を語らねばならなかったのである。

神学はもはや無前提に超越について語ることはできないし、逆にもし人間の超越認識能力について言及するならば、神学自らがフォイエルバッハの宗教批判を証明してみせることになってしまうというジレンマに直面していたのである。それ故に神学は人間の超越認識能力を語ることなしに、超越について語る道を模索するか（神学的人間学を全く拒否するか）、フォイエルバッハの宗教批判を克服し得る方法で、もう一度人間の超越認識能力について語らねばならなくなった（新しい神学的人間学を構築する）のである。

本論文ではこのような課題との20世紀の（ドイツ語神学界の）神学者の取り組みを、3つの類型に整理した。すなわち第1の類型は、この問題に対して「神学を徹底的に人間学に解消する」ことによって応えようとした立場であり、それによって神認識の人間学的な基盤を見出そうとする試みであった。第2の類型はこの問題に「神学を徹底的に人間学から自律」させることによって応えようとした立場であり、それは19世紀に完成した人間学的な、あるいは心理学的な無神論からの批判、他方で神学内外から出された形而上学批判に対応するために生み出された、ラディカルな啓示神学の形態である。第3の類型は第1類型と第2類型との「調停の道」であり、「人間学を基礎学とする神学の再構築」の試みであった。

第1の類型は、20世紀神学にとっての19世紀神学の見方であり、19世紀の神学が完全な意味でそのようなものであったと言い得るかどうかは疑問であるが、第1の類型はその意味では20世紀神学が克服しなければならないと考えた仮定の批判対象の総称であった。それ故にこのような立場は第2類型を想定した場合にだけ成立するのであり、一般に考えられているようにシュライエルマッハーからトレルチまでの神学史的な展開がそのようなものであったということとはできないというのが本論文の主張である。

第2の類型はカール・バルトの立場を考えているのであるが、これはバルト自身やバルト主義者が考えた程には成功してはいないこと、そしてバルトの試みは、結局は第3の類型に限りなく接近していたということを本論文では明らかにしている。また第2類型はバルト自身のみなならず、20世紀後半にはE・ユンゲルなどによって新たな視点から整理され、展開されたものである。

第3の類型については、まさに多様な形態を見出すことができる。たとえばE・ブルナーの「結合点」、P・バーガー

の「日常における超越のシグナルの発見」、R・ブルトマンの「前理解」という考え方、W・パネンベルクにとっての「歴史としての啓示」という構想や「神学の基礎学としての人間学」という構想、さらにはJ・モルトマンの「先取り概念」も自然というパラダイムの再構築、そしてP・ティリッヒの象徴論的な神認識もこの類型に属する議論として本論文は取り扱っている。さらに本論文では、本人にはそのような意図はなかったが、その神学の意図せざる帰結として、いわゆる自然神学論争後に自らの神学の密かな修正を試みたK・バルトの立場は限りなくこの第3類型に近づいていると主張している。

以上のような類型論をもとに20世紀神学史を整理し、最終的には第3類型、すなわち「人間学を基礎学とする神学の再構築」の可能性を検討し、そのような神学を構築するための見取り図を提示したのが本論文である。

2 各章の概要

第1章では社会学者ピーター・バーガーによる20世紀神学史についての考察が取り上げられている。バーガーは世俗化された世界において、人間がいかにして超越の次元を認識し得るのかという問題に取り組んでいるが、その際バーガーはこの取り組みのためにプロテスタント神学が3つの異なった対応を試みたと考え、それを「演繹的方法」、「還元的方法」、そして「帰納的方法」とそれぞれ呼んでいる。バーガー自身は「帰納的方法」の有効性を提示しているのであるが、本論文ではバーガーの見解について批判しつつも、この方向性を肯定し、本論文の考える「第3の類型」との関係で考察している。

第2章はいわゆる「自然神学論争」についての考察である。この論争についてはこれまで1934年のブルンナーの「自然と恩寵」という論文に対してバルトが「否!」という論文を書いたことによって生じたと論じられてきたが、本章では1934年の論争についてはそれほど重視してはいない。なぜなら1934年の論争は、1919年以来の両者の神学的議論の帰結であり、1934年以前に既に議論は出尽くしていたと考えるからである。そして本章ではバルトの「否!」はこの1919年以来の神学的な議論の帰結ではなく、むしろ政治的・社会的要因によるものであり、両者の論争点は未完であり、課題として残されたままであると考えている。そしてそれがそれ以後の20世紀神学の課題ともなったと見ている。

第3章ではこの時代のもうひとりの代表的神学者であるルドルフ・ブルトマンにおける神認識の問題が論じられている。ブルトマンは神学的解釈学において重要な貢献をなした神学者であるが、この問題の文脈の中で彼の「前理解」の問題を取り上げ、これをバーガーの類型とは異なって、第3の類型に分類している。

第4章では、第2章と第3章の議論を第5章以下の議論とをつなぎ合わせるために、ルードヴィッヒ・フォイエルバッハの宗教批判を取り上げている。フォイエルバッハは20世紀の神学史、とりわけ神認識の問題を考える際に必要不可欠な思想家である。本章ではフォイエルバッハの人間学的な無神論を明らかにし、その上でフォイエルバッハに対するバルトとパネンベルクの神学的対応を明らかにした。バーガーの類型論に従えば、バルトのフォイエルバッハへの対応はまさに「演繹的方法」によるものであり、パネンベルクのそれは「帰納的方法」によるものである。

第5章と第6章ではパネンベルクを取り扱っている。第5章は初期パネンベルクの神学のプログラムの解明であり、それはP・バーガーが「帰納的方法」と呼んだものであるが、「歴史を通しての神認識」というプログラムであることを明らかにし、その具体的な内容について考察した。第6章はパネンベルクの神学的プログラムをより包括的に解明し、それが人間学を基礎学とする神学の構築の試みであることを明らかにしている。

第7章と第8章ではモルトマンを扱っている。第7章では初期モルトマンが提示した歴史的なパラダイムによる神認識の課題を明らかにしている。その際モルトマンがしばしば用いた「先取り」(antizipation)という概念に注目している。第8章では後期モルトマンの神学における「歴史」から「自然」へのパラダイム・シフトについて指摘し、彼による「自然」というパラダイムによる神認識の再構成について考察している。

第9章では60年代以後の神学の中でバルトの立場を継承し、それをさらに徹底させた立場としてエバーハルト・ユンゲルの神学的認識論と神学的人間学とを取り上げて検討している。その際パネンベルクの神学との違いを明瞭にし、パネンベルクの神学的な認識論が「普遍」から「特殊」へ、であるのに対して、ユンゲルのそれは「特殊」から「普遍」へであることを明らかにしている。

第10章では、ティリッヒの象徴論が取り上げられている。それは象徴論的な神認識の可能性についての考察であり、本書で指摘した「第3の類型」、すなわち「人間学を基礎学とする神学の構築」の試みのひとつであるとされている。

これらの各章の考察を経て、後者の課題と取り組むために終章で「類比」(analogia)についての考察を展開している。

それは人間学から神学へという構想の再構築、ないしは「人間学を基礎学とする神学の再構築」という課題との取り組みを明らかにした。それは神学的類比論の再構築として提示されている。

論文審査の結果の要旨

本論文は20世紀神学史の根本問題を、無神論的精神状況の現代において、人間はなお神について語りうるか、また如何にして神を認識しうるかということであると捉え考え、この問題への主要な取り組みについて考究したものである。論者はその取り組みを三つの類型に分ける。第一の類型は「神学を徹底的に人間学に解消する」方法であり、19世紀神学を継承するものであるという。第二の類型は「神学を徹底的に人間学から自律させる」方法であり、K. バルトの立場である。第三の類型は、前二者の間の「調停の道」であり、「人間学を基礎学」とする神学の再構築の道であるという。本論文はこの第三の立場に立ち、前二者の試みが持つ問題性、第三の立場の必然性を説得的に示し、その多様な可能性を探った労作である。この論文の成果は次の点にまとめうる。

1) L. フォイエルバッハの無神論的人間学との対決のうちに、20世紀神学の課題の核心があったことを、論者はあらためて明示した。20世紀の神学が直面したのが無神論的精神状況との対決であったとすれば、神学を無神論的人間学に解体したフォイエルバッハとの対決のうちに20世紀神学の特徴が際だっていると論者は考える。論者によれば、フォイエルバッハの批判は、宗教やキリスト教を否定することではなく、宗教を「人間の直接の本質」として説明してみせたのである。「類」としての人間の本質は「無限」であり、宗教は無限なものについての意識であり、人間自身の無限性を神として対象化したものである。20世紀神学の開始を告げたといえるバルトは、フォイエルバッハの宗教批判の正しさを一方で積極的に認めようとする。人間の宗教意識、人間的な可能性から出発する19世紀近代神学へのラディカルな批判という側面を持つバルト神学と、神学の秘密を人間学とするフォイエルバッハの思想は不思議なことに共通の批判対象をもつことになると論者は驚きをもって確認する。バルトはフォイエルバッハの宗教批判を単に肯定しているのではなく、この宗教批判の及ぶことのない神学的出発点を「神は神によって知られる」という命題に見いだしたとする指摘も的確である。これに対して第三の立場に立つ W. パンネンベルクは、バルトの批判が、対決を避けただけであり、問題はフォイエルバッハが捉えた、人間の本性としての無限の質に関わるとする。人間は自己自身に対して絶対的に力を有しており、このような無限なる本質が人間に内在するとして、自己完結的な人間学を展開するフォイエルバッハをパンネンベルクは批判する。論者はパンネンベルクが人間の本質を、「人間の有限性を越え出ながら、無限なるものに対する経験の中で自己をそれに捧げてゆく性格」と捉えていることに第三の立場の可能性を見るのである。

2) バルトに代表される第二の立場から徹底的に批判された「人間学」であるが、人間のうちにある無限性の意識は、宗教と神学とがそこから出発せざるをえず、出発することのできる基盤であり、そのような「人間学」はなお残されるべきことを、論者はあらためて説得的に示した。20世紀神学最大の論争と見られるバルトと E. ブルンナーとの間の「神の似像」をめぐる「自然神学論争」(1934年)において根本で問題になっているのも、「人間学」に関わるものだと論者は考える。ブルンナーによれば「人間学こそ、人間の自己自身の理解の場であり、それは信仰と非信仰との共通の基盤」なのである。バルトは、神と人間の間にこのような結合点があるとするブルンナーに対して『否—エーミル・ブルンナーに対する答え』を書き、人間学的前提を置こうとする考えをきっぱり否定したが、晩年のバルトが「人間には罪によっても変えられない、恒常的な人間の本質が存在する」ことを認めていることに論者は言及している。神認識に関してバルトが密かな訂正をしていることに論者は注意を促しており、「人間学」をめぐる問題の底深さを垣間見せてくれているのは貴重である。

3) 新たに人間学を基礎学とする神学の再構築の可能性を、論者は主にパンネンベルクと J. モルトマンのうちに、その膨大な著作群を渉猟しつつ、その豊かな実りの可能性を見いだしている。論者によれば、パンネンベルクが初期以来試みているのは、神の問題を解明するための人間学的基盤を発見しようということであるという。彼の手がかりは人間の世界解放性という現象である。この現象を彼は「人間は一切の現存するものや一切の有限なもの一般を越える無限な現実に依存しているということを表現する根拠」と見なしている。この現象を見据えながらパンネンベルクが人間学の中心課題とみるのは、「主観性をはじめてそのものとして構成する人間の自由の可能性」の問題であるという。神信仰は自由の否定を意味するのか、それとも自由の起源は宗教的、あるいは神的なものによって基礎付けられているのかという問をパンネンベルクが

根本において問うていることに論者は注目する。またモルトマン神学の鍵概念ともいえる「先取り」に論者は焦点を当てて考察する。ヘブライズムの根底に存する約束の信仰における「先取り」において、人間は現実を将来から見つめ直し、それによって始めて、歴史の地平が切り開かれることになる。ヨーロッパ的思惟を支配してきたコスモスの世界観に代わる歴史の地平に思惟の新たな形式を見いだそうとする現代思想の大きな流れの一つをキリスト教神学が担っていることを論者はよく示している。

4) 神学が政治的状況と緊張した関わりをもつことを二つの実例を通して本論文は明らかにしている。その一つは2)でもふれたバルトとブルンナーの自然神学論争におけるバルトの頑ななまでの自然神学否定の背景に存する状況認識である。神認識の可能性が自然や既存の秩序の中に見いだされうるとするブルンナーの人間学は、あまりにも無邪気であり、この人間学は台頭しつつあったナチスの国家の神話に宗教的正当性を与えるものと、ナチスと対決するバルトには思われたのであり、この論争が単なる神学論争でなかったことを論者は明らかにしている。もう一つはバルトの立場を徹底化したと考えられるドイツ民主主義共和国（東ドイツ）出身のE. ユンゲルのバルト受容の問題である。バルトは政治的に親共産主義的であり、だからこそバルト神学は東ドイツの神学部で最も奨励され、政治的干渉を受けずに済む研究分野であったことに本論文は注意を促している。ユンゲルは政治的コンテクストに超然としていてと通常見なされているが、論者はこうした見方を批判して、ユンゲルにとって神学研究を政治的コンテクストから切り離すということが、彼の置かれた東ドイツでの政治的コンテクストであったことを明らかにし、社会的状況と思想の緊張した関係を炙り出している。

このように本論文は無神論的状況の現代における神学の様々の試みを広い視野と批判的姿勢をもって論じた労作であるが、批判すべき点もなくはない。その一つは、「人間学を基礎学」とする第三の立場に関して、論者自身の「人間学」が尚十分には明示されていないことであり、また他の一つとしてはドイツ神学に偏りすぎていることなどがあげられうるが、これらは今後の論者の課題であり、本論文の価値を大きく損なうものではない。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお2005年7月19日、調査委員3名が論文内容とそれに関した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。